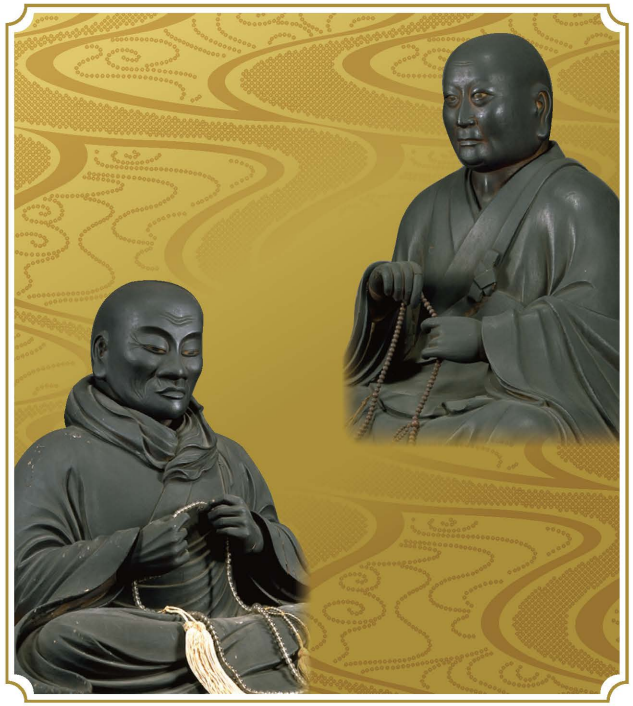
慶讃法会（きょうさんほうえ）

おなじは六

人とあう

本山佛光寺



親鸞聖人と法然上人（右上）

撮影：藤森 武

本山佛光寺

〒600-8084　京都市下京区新開町 397

Tel.075-341-3321 ／ Fax.075-341-3120

http://www.bukkoji.or.jp/

慶讃法会基本理念

大悲に生きる人とあう
願いに生きる人となる

2023年（令和5年）、本山佛光寺は、慶讃法会として宗祖親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年、聖徳太子1400回忌に併せ、第33代真覚門主伝灯奉告法要をお勤めします。

私たちの生活は、人工知能（AI）をはじめとするテクノロジーの発展により、想像もつかないほど便利になりました。

ところが、相変わらず心の平安は得られず、生きている意味を見失い、生かされている事実を忘れ、傷つけあっていることさえも気づかず、互いに孤立を深めています。

世の中が移り変わり、どのような境遇にあっても、阿弥陀さまの大悲のお心に生きられた親鸞さま。そのおすがたに流れるお心を、自らの願いとして生き抜かれたのが私たちの先人であり、今の私に届いている南無阿弥陀仏の歴史であります。

それは、思いを超えたはかり知れない命との出遇いであり、その命の願いに生きることが、苦悩の中を生きる力となるのです。

時と処を超えて、人から人へと伝わるともしびを、「大悲に生きる人とあう　願いに生きる人となる」と掲げ、このたびの法要をご縁に歩んでまいりましょう。

私たちの人生には無数の出会いがあります。その中で、この出会いのおかげで今の私がある、という「出遇い」はありますか？

「あう」には、私たちが日常で使う「会う」と、「遇う」があります。「会う」は「会いに行く」のように予定を立てることもできますが、「遇う」は縁あって思いがけずいただくもの。自分のはからいを超えたところにいただくのが「遇う」です。

◎ いつのまにか

会社の中で管理職となり、責任も役割も一気に大きくなった頃のことです。役に立たないと認められない、という不安に追い立てられていました。業績に貢献すれば評価が上がり、貢献できなければ評価が下がる。「役に立つ、立たないで判断するのは人間のものさし」と、法話会などで聞いてきてはいても、いつの間にか、役に立つ存在であらねば価値がないという思いに浸食されていました。同僚は評価をめぐって競争するライバル、上司は評価を下す裁判官です。

仕事をうまく共有できずに抱え込み、深夜残業の日々が続いていたある日、勤務中に倒れてしまい、脳神経外科のお世話に……。歩くことはおろか、頭を上げる力が入らず、座ることさえできなくなっていた私に、多くの同僚が寄り添ってくれ、あちこち電話をかけて病院を探してくれたり、受診に付き添ってくれたりと、手を尽くしてくれたのでした。

それからしばらく休養することになり、たくさんの人に迷惑をかけてしまいましたが、皆さん、私を責めることなく「ゆっくり休んでくださいね」と気遣ってくれました。身の回りの一人ひとりが、私を見守ってくださっていたのだなあと感じられた出来事でした。自分の中で勝手に、競争するライバル、評価を下す裁判官と思い込んでいた人たちに、私はずっと支えてもらっていたのです。

◎ 違う視点

その時、ふと気づかされました。互いに迷惑をかけあいつつも、支えあいながら、社会は成立している。「私はできないことが多すぎる、もっとできなきゃ価値がない」という怖れは私の思い込みです。

できないことは他の人たちが助けてくれるし、何かができなくても、それで見捨てられるわけじゃない。「自分の思いは固定的でも実体でもないのだから、とらわれずに、ありのままに受け止めれば、自分の思い込みとは違う視点をいただくことができる」。そんな、いつかの法話会でお聞きした言葉が、すとんと胸に落ちてきました。

私たちは、人を通して真実に遇います。それは、親鸞聖人が法然上人に出遇われたような、この人なればという師をいただくような大きな出遇いだけを指すのではありません。日常生活の中でも、当たり前すぎて気づいていなかった周囲の人たちの思いを通して、私を導いてくださっているはたらきかけに出遇いなおすことでもあるのです。